

単一民族神話の起源 ―― 〈日本人〉の自画像の系譜

いくさの中に青春埋もれぬ加賀守の如く、
 国に来て 上野喜子（朝日新聞）
 一九一〇年八月、日韓併合を祝して新聞雑誌は一新
 に特集を組み、古代日本は混合民族で、朝鮮民族と血
 縁が深く、併合は復古であるとし、両民族の同化を提
 唱する大隈重信、海老名弾正、内藤湖南らの論を掲載
 した。家族国家論や、かつて内地雑居に反対した井上
 哲次郎ら純血論者は沈黙を余儀なくされる。混合民族
 論は公認学説となり、両民族の「同祖論」は朝鮮総督
 府の同化政策を支える理論的支柱となった。家族国家
 論者も、台湾人や朝鮮人を家族国家の「養子」と性格
 づけて、純血政策から転向した。

ところが大正中期より逆流が始まる。柳田国男は、
 ジュネーブでの孤独体験から、日本を「常民」の住む
 危うい孤島と感じ、土着文化防衛に使命感をもつ。津
 田左右吉は、記紀の記述を単なる物語とし、民族対立
 や大陸人渡来の史実性ないし重要性を否定した。和辻
 哲郎も、善悪の彼岸の「自然的生」という日本の特性
 の起源を、日本の風土の産物として有史以前に遡及

刺激的な主題を
 客観性貫いて追求

(そきゅう)させ、渡来文化の過大評価を批判する
 この潮流を側面から支持したのが、骨格の形質測定
 から石器時代人を日本人の直接的祖先とした清野謙次
 で、彼の「同祖論」の否定は、厚生省内で支配的な、
 民族の遺伝的形質の改良を説くナチかぶれの優生学論
 者たちの混血反対論と結びつく。ここに民族間結婚
 「奨励策」をとる朝鮮総督府との対立が生じた。
 植民地を失った戦後、混合民族論は政治的存在理由
 を失い、津田・和辻らの平和的古代像が象徴天皇制の
 論拠となり、原始共産制の内部解体から歴史を説明す
 るマルクス史観とあいまって、単一民族論が有力とな
 る。しかし国力回復・国際化とともに、騎馬民族説な
 ど、混合民族説が復活の兆しを見せている、という。
 刺激的な主題を学問的客観性を貫きつつ追求した傑
 作で、日本知識人の独善的世界像を分析する辛辣（し
 んらつ）な筆致は「戯画化された日本帝国主義論史」
 という印象を与える。著者は日本を多国籍国家として
 構想すべきだとするが、それならば比較対象として
 英仏の植民地問題とともに、一民族が優越的地位を占
 めるロシアや中国の少数民族問題も重要であろう。

単一民族神話の起源

小熊英二著



(新曜社・450頁・
 3,914円)

おぐま・えいじ 62
 年生まれ。東京大学大
 学院総合文化研究科相
 関社会科学専攻博士課
 程在学中。